みなとオアシスを活用した賑わい振興について

港湾空港部　港湾計画課　黒瀬　航

１．「みなと」を活用した地域振興の必要性

かつて、「みなとまち」は経済の中心地であった。小型船舶による輸送・人力荷役・現物取引が主流だった時代、物流・商業・金融すべてが集まった港町は、多くの人々で賑わっていた。しかし、輸送手段の多様化・労働の機械化・物流の合理化など、時代が進むにつれ、「みなとまち」経済は崩壊した。今日では、賑わいを失った港町の地域振興が重要な課題となっている。

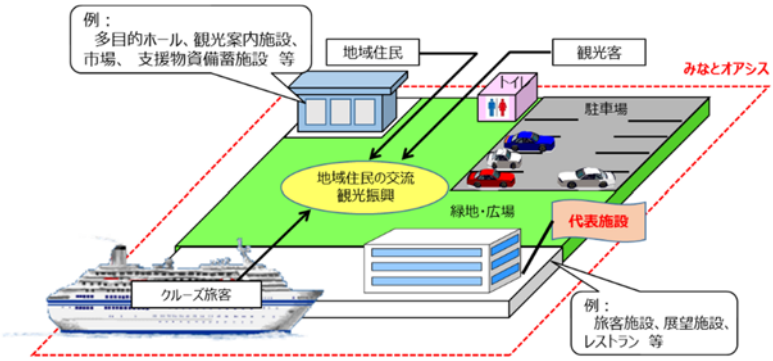
だが、既存の経済基盤が失われても、観光産業や水産業、海に開かれた特性など、「みなと」は多くのポテンシャルを秘めている。国土交通省では、みなとの持つ資産を住民目線で再評価・活用し、地域活性化を促していく取り組みを行っている。

２．「みなとオアシス」とは

「みなとオアシス」とは、地域住民の交流や観光の振興を通じた地域の活性化に資するみなとを核としたまちづくりを促進するため、住民参加による地域振興の取り組みが継続的に行われる施設を「みなとオアシス」として登録する制度である。2003 年よりスタートし、2019 年 4 月 14 日時点で全国 127 箇所が登録されている。

中心となる代表施設と、交流・休憩、物販、飲食等を提供する施設から構成され、住民参加による様々なイベントが行われている（図―１）。

また、賑わいの創出のみならず、観光・交通情報の提供や、災害支援等の役割も果たしている。



（図―１）みなとオアシスのイメージ

３．関東地方整備局管内のみなとオアシス

関東地方整備局管内では、大洗、千葉みなと、木更津、“渚の駅”たてやま、川崎、横浜港、“ペリー久里浜”の 7 箇所が登録されている（図―２）。

また、新たなみなとオアシスとして、大磯港が現在登録に向けて調整中である。

（図―２）管内のみなとオアシス

４．管内みなとオアシスの取り組み内容

みなとオアシスの持つ役割に沿って、管内の取り組み事例を紹介する。

４．１「賑わいの創出」―“渚の駅”たてやまの事例

（図―３）たてやま海まちフェスタ

（図―４）客船「にっぽん丸」寄港歓迎

毎年開催される「たてやま海まちフェスタ」（図―３）では、様々な船の乗船体験や船内見学を行うことができ、2017 年の来場者数は 1 万人を超えるなど、大きな盛り上がりを見せている。また、館山夕日桟橋に寄港するクルーズ船の歓迎イベントも、みなとに大きな賑わいをもたらしている（図―４）。

４．２「食」の発信地―大洗の事例

（図―５）絶品しらす丼

みなとオアシスでは、新たな食文化を発信すべく、地元で水揚げされた水産物や周辺地域の特産品を使用した飲食物を「Sea 級グルメ」と名付け、施設内で販売したり、各種イベント等で出店販売したりといった取り組みを行っている。

大洗では、特産品であるしらすをふんだんに使用した「絶品しらす丼」を提供している（図―５）。

４．３「憩い」と「防災」―千葉みなとの事例

（図―６）千葉ポートパーク

みなとオアシスは、人々に憩いを提供するのみならず、災害時の有効活用が可能である。憩いの空間と防災機能が見事に融合している施設が、千葉みなとの千葉ポートパークである（図―６）。普段は人々へ親水空間を提供するための修景・休息緑地として利用されているが、隣地に耐震強化岸壁を備え、有事の際には消防隊の活動拠点や災害支援物資の集積所として機能する。

５．今後の課題と展望

様々な盛り上がりを見せているみなとオアシスだが、まだまだ知名度が低い・規模の大きなイベントを受け入れる施設の整備が追いついていない等の課題がある。国土交通省港湾局では、積極的な広報による認知度向上活動、オアシスの機能強化を社会資本整備総合交付金の重点計画に位置づける他、各種補助制度による施設整備の支援を行う等、さらなる「みなと」振興に取り組んでいるところである。